

「言葉を残す」

旧約聖書 アモス7章10節～17節

「主は家畜の群れを追っているところから、私を取り」(7:15)

- 1、アモスの時代、なぜ富める者と貧しい者が出来たのか。古代イスラエルでは部族の宗教的連合体の形で民族共同体を培ってきた。この時代は基本的に農耕と牧羊を中心とする平等社会であった。だが、王制国家を形成され(サムエル記)土地の意味を含む経済諸関係の根本的变化が起きる。王権を支える官僚機構、国家祭儀のための祭司階級、軍人機構など直接生産に携わらないで、特権的力をもつ階級が出来て、権力構造の上部を占めることになった。大土地営農が成立し、その生産物が流通商品となり、彼らの経済基盤となる。農業労働には土地を失った没落農民や奴隷が動員された。王国時代にこのような社会層の分化と格差の広がった。この不義にたいして「主はシオンからほえたけり」(アモス1:2)と切り込む。
- 2、今日の箇所は、アモスと大祭司アマツヤとの対決場面、国家の礼拝所ベテルである。アマツヤはアモスを王に反乱罪で訴え、国外ユダへの退去を命じた。「そこで糧を得よ」。預言者を職業と考えていた。アモスは預言者を生計のためにしていたのではなかった。14節「私は預言者ではない。預言者の弟子でもない。家畜を飼い、いちじく桑を栽培する者だ。羊を飼い、食料の生産者であった。いちじく桑は貧しい者の食料。彼はヤハウエに召されて預言者となった。「イスラエルは敵に捉えられる」。国家の滅亡の審判預言は、権力者からの弾圧を招き身の危険が及ぶ。彼の行為は、神自らが彼をとらえ強制し、神自らの決定を伝えることであった。語らざるを得ない言葉の使者であった。専門家によればアモスが預言活動をしたのは1年ぐらいだという。
- 3、木田献一氏は「古代社会のなかで宮廷や聖所以外の所で文書が書かれ保存されたことは極めて稀なことであった」(「職務」p.230)という。権力批判の文書保存の貴重さが指摘されている。(1970年代の山口の中谷康子さん「自衛官合祀違憲訴訟」の例での、中平健吉弁護士という言葉「行政訴訟の費用の一千万はその国の裁判の制度の公正を欠く」、結果は敗北だったが文書は、神に付ける民衆の記憶と言葉を残した)。民衆の側の記録が残るということは如何に大きな出来事か。木田氏はこの7章10-17の物語の文学類型を「アポフテグマ」(状況描写を付けて本人の言葉を残す文学形式)だという。最初の文書は、8欄の羊皮紙2枚と、6欄の羊皮紙にかかれていたと分析している。アモスは農民であって農民はでない。高い言語文化とイスラエルの教養、国際情勢に通じる情報の保持者。アモスを用いて神が為したもうた出来事は「言葉を残す」業であった。人は人生のある場面で。唐突であるような役目を負う。言葉を残す証しに「神の言葉」は貰かれてゆく。短編でも言葉の証しを大事にしたい。預言者とは言葉を残す者。